

登校拒否・不登校を考える夏の全国合宿2010 in 福島

若者シンポジウム「生き方を語る」

福島の全国合宿から、若者シンポジウム「生き方を語る」の記録をお届けします。

4人の若者たちが、それぞれ、不登校やその後の経験を大事にしながら、自分ならではの「生き方」について、思う存分考え探ってきた、その豊かな時間を感じていただけることと思います。

好評を博したこのシンポジウム、どうぞじっくりお読みください。

シンポジスト 前北海 (26歳/千葉県) 大岡 真一郎 (31歳/福岡県)
小塩 成美 (20歳/埼玉県) 長井 岳 (34歳/東京都)
司会 増田良枝 (埼玉県/越谷らるご・フリースクールりんごの木代表)

司会：私は、フリースクール全国ネットワークの代表理事を奥地さんと一緒にやっております、また埼玉県越谷市の「フリースクールりんごの木」で子どもや若者と関わっています。今日は4人の若者をお呼びして、実際に当事者であった若者から、今も当事者であるのかもしれませんが、現実のお話を伺っていききたいなと思います。

まず、不登校とかひきこもり状態になった前後のいきさつをお願いします。

前北：普段は千葉で活動していて、「NPO法人ネモ ちば 不登校・ひきこもりネットワーク」の代表をやらせていただいています。

僕は中学校1年生ぐらいの時に不登校になったんですが、その時にいろいろ嫌なことがあって、先生と、たとえば「制服をなんで着なきゃいけないの」とか、「なんで体操服に一々着替えるんだ」とか、「なんで並んで体育

館に行くんだ」とかいろいろ話していたんですね。「それはそういう決まりだから」と先生に言われてしまったんです。でも、僕が望んでいたのは、その「なぜ？」に対する先生たちとの対話だったんです。そういうものがストレスになって、もう行きたくないなあ、学校嫌だなあと思って、学校を休んでしまったわけです。

大岡：学校に行かなくなったのは小学校6年生ぐらいだったと思うんですけども、自分の好奇心みたいなものが、田舎の学校の中に納まりきらず、そのままあっちこっち放浪の旅に出てしましまして、それが今でも続いている感じです。そういったところで見つけてきたものとか付いた価値観というものを、できれば自分だけではなく広く還元していく、たとえばひきこもっている子や、表に出たいけれどそういうことが困難な人に、ちょっと

したきっかけになればいいなあと、インターネットで旅番組を配信しています。ちょっとそれをご紹介します。

*** 旅番組の映像の一部を上映 ***
<http://airnx.funnysunday.com/>
スローライフな旅 AirNX
～旅するビデオキャスト放送局～

・・・続きは、ウェブでということで、9月中旬からアクセスしていただければ見ていただけます。

学校に行けなくなってから、山とかアウトドアが自分の学校代わりだったような感じなんで、そういったところで今も活動しています。

小塩：小学校1年から学校に行かなくなって、行かなくなった直後からホームシューレに入って、2、3年前からボランティアも始めました。最近アルバイトをしながら、進路について考えようと思っているところです。

長井：福島県出身です。中学校の時、丸刈り校則反対運動をしているうちに、不登校になりました。その後、中卒で就職、サポート校、一般大学を経て、今シューレ大学にいます。

司会：みなさん非常にユニークな生き方をされてきたし、されているんですね。これからのお話が楽しみです。ご家族との関係はどうだったんでしょうか。ご両親はちゃんと受け止めてくださったのかどうか、その辺をお願いします。

家族はどう受けとめたか

前北：「あーあ、学校行きたくない」と僕は二階の一人部屋で寝ているわけです。すると、コンコンとドアがなる。母親がいて、「ねえ、ねえ、海君、学校はどうしたの?」と。「行かないよう」と言うと、ガチャッと閉まる。はあ、疲れた、疲れたと寝ていると、またコンコン。「移動教室は行ったらどう?」「行かないよう」と言うと、またガチャッ。そうするとまた来て、今度は「テストは?」と言うわけですね。たぶん、みなさんの心にズキッときていると思うんで、話しながらニヤニヤしてしまうところもあるんですが、そんなこんなで、ひととおりの嫌な思いは経験しているんです。

しかし、僕の母親の友達が、たまたま千葉県内で親の会の世話人さんをやっていたんですね。そこに行ってくれたらですね、3日間ぐらいコンコンといわなくなりました。やったぜ、と思ったら、4日目ぐらいにコンコンと来たんです。ああ、またかと。その親の会は、月一回だったので、しばらくするとまたひどくなるわけです。「どうするの、あなた?」みたいな。うざいなあとと思うけど、またいる。でも、次に親の会に行くと、今度は5日我慢できるようになるんですね。よしっ!と思うんですけど、まあその繰り返しですよ。そんな感じで、母親とは良好な関係ができてきたんです。自分の言いたいことや悩みや、どうしていくというような話を一つ一つしていくことができました。しかしここで出てくるのが父親です。父親は大嫌いなんですね。僕。今でもあんまり話はしないんです。でも、ここで一つ言いたいのは、親子関係で大事なものは、一人でも大丈夫だということ。両方の親

と仲良くしなくても全然大丈夫、どっちかでいいということだけ言いたいです。

大岡：うちの親はどちらも教育関係の仕事をしていまして、母親が保育士、親父は教員をやっています。当時教員の息子が学校に行かなくなるというのが、田舎ではかなり目立ったというか、もともと学校の成績はよくなかったですから、「お前学校の先生の息子なのになんで勉強できないんだ」と言われることもいっぱいあって、やっぱり親に対する反発、そういうことを押し付けてくる環境への反発というのもあって、自分なりのアイデンティティってどこにあるんだろうと一生懸命探しますよね。それがちょっと人よりも早かったということで、なんか「ここじゃないどこか」というのを求めています。でもなかなか自分一人の力じゃ抜け切れないという時に、親も悩み、いろんな場所に連れて行って一緒に考えて、そこで出会ったみなさんのような人たちにヒントをいただいて、今ここに居るといふ形になると思うんです。

最初に体制やレールを踏み外した時に、大きな障害になるのって、身内とか本当に近い人なんですよ。うちの場合は教員の家庭だということで、やや厳しい状況にあったと思うんですけども、親自身の抵抗感というものが普通とはちょっと違ったのかなと、この歳になると思うんです。親自身が悩みながら付き合ってくれたと思います。

小塩：我が家は特には何もなく仲は良かったです。一時期は、弟と喧嘩とかで荒れましたけど、最近は普通ですね。

司会：小塩さんが安定して自分の好きな道で

生活していることの意味がわかったような気がしますね。

長井：そんなに学校へ行けと言われた記憶はないですね。行けなくなった当日、どうしても靴がはけなくて、コンクリートの玄関に足をつけたらひんやりしていて、後ろで母親がずっと立っていました。そのいたたまれない時間が、とても長く続いたように思っていたんですが、母親に聞いたら30分ぐらいだったらしいです。次の日からは「学校に行け」とは、言われませんでした。それから、中卒で就職をしたり、一般の大学に入ったり、その大学を辞めてシュレー大学に入ったりと紆余曲折しているんですけども、そのたびに「岳がそう言うのであれば」と言って、全面的に応援してくれたというのは、すごく支えになっているなと思います。

司会：家族との関係はみなさん何かまあまあだったのかなという感じがしました。前北さんがお父さんとの関係を触れていましたけれども。

では、次に「生き方」ということで、このユニークな方たちがどう生きてきたのかというところを語っていただきたいなと思います。

こんなふう生きて、考えてきた

前北：中学校の時に不登校になり、その後実は定時制高校へ行っちゃったんですね。行ってしまって、ああ、失敗したなあと思いました。暇なんですよ、ただただ毎日毎日学校へ行くというのはね。でも、なぜそこに行けたかということ、実は授業が楽しくなかったんで

すね。「お前の授業つまんないぞ」ということは中学校の時も言っていたんです。その時は「ノートを書くために授業があるんだ」みたいなことを言われて、そうですかという感じだったんですが、それを今度、家庭科の先生に言ったんです。そうしたら、その先生、すごいへこんだんです。ごめんって。つまなくて、ごめんって。廊下歩いていたら、体育の先生に「前北、そんなこと言わないでくれよ、家庭科の先生も頑張ってるんだからさあ」なんて言われちゃって、そういう対話があったんです。僕が望むような、で、授業のスタイルも変えてくれたりして、それはそれでよかったんだけど。

でも学校へ行って何が駄目だったかと言うと、僕は不安だったから行っちゃったんです。「海は海のままでもいいのよ」なんてことを言われて、ああ僕は僕のままでもいいのか、そうかもなと思いつつ生きてきたのに、勝手に不安を覚え、勝手に学校へ行っちゃったのね。それが今はちょっと悔しいなという思いをしていて、卒業する頃はそこですごい悩んでいたんです。このまま普通に戻りたくもないし、普通に働く自信もなかった。その時に、千葉県内の親の会やフリースペースを繋ぐ新しいNPOを作らないかという流れがあって、それはおもしろそうだと思ってやったんですけど、でも正直言えば普通の社会に戻りたくなかったから、ちょうどいいのが見つかったというところもあったりした。

今、楽しいかどうかという話を増田さんに振られているんですけど、すごい楽しいんですね。なぜかと言ったら、不登校の頃は僕は未来を描けなかったんです。毎日毎日不安で、明日も見えない、どうなるかもわからない、就職できるのかもわからない。でも、僕は今

未来を描けます。きっとたぶん数年後は、芹沢さんの代わりに僕が話しているでしょう、90分。(笑)しかし、今は20分程度のものなので、しっかり聞いておいてくださいね。今の内にね。だからすごく楽しいんですね。

今はNPO法人ネモネットと柏の葉シュレというところでサポートスタッフをしたり、フリースペースユニークというところでスタッフをしたり、千葉県子どもと親のサポートセンターという施設で嘱託職員をして、子どもたちをサポートしているんです。そこで思うのは、ようやく僕しかできないことが見えてきた。数年間、どういうふうにやっていこうかなあと思っていたけど、そろそろ僕しかできないことがあるんじゃないかということもまた、お話ししていきたいと思います。

司会：先程、居場所・フリースクールという分科会で、不安と自信は同じものなんだという話をされてましたよね。私は、おもしろいなあと思ったんですが、さらっとお話ししていただけますか？

前北：たぶん子ども自身に不安と言う気持ちがあると思うんですが、大人側はついついその不安感という今ある気持ちを取り除こうとしているんじゃないかと、僕には見えるんですね。僕は、フリースペースのスタッフをしているけど、フリースペースに一回も行ったことがないです。見学すら行ったことがない。自分で自分の悩みを考え消化していったんですね。ある時に、自分が弱い気持ちというのは、自分なんだと。それは、いいことでも悪いことでもなくて、弱い自分というのはそれまでなんだ、強くなかったっていいじゃないかということに気がついた。そのようにして、

悩みを消化していったそれが変換されて自信になった、まあ質量保存の法則ですよ。AはBであるということです。だから、もしAをとってしまったらBはなくなってしまうんです。自信の元になる不安や、自分がなんだろうという気持ちを消化し切れていないうちに、それを大人がつまみ取ってしまったら、自信にならないのではないかと思うんです。僕は悩み続けて、悩みがなんなんだろうというところが見えてから、その悩みを自分の中に取り込むことができた。だから、自分は自分でいいし、普通に戻るということは、自分じゃないと思ったから、高校生の頃に、俺は普通のことはもうしないと決めたんです。

司会：すごいですね。悩み続けた先が自信に繋がったという、そんなお話だったと思います。

大岡：学校が合わなくなり始めたのは、転校がきっかけでした。わりと大きい小学校から、全校生徒が400人ぐらいの、1学年2クラス位しかない田舎の小学校に転校しまして、それは子どもにとって文化圏の違いが大きかったと思うんですよ。隣町でしたけど、子どもの雰囲気というのは校区で変わりますから。それがちょっと自分の肌に合わなくて、今までの自分のキャラクターというものを一回無しにして、もう一回ここで自分というものをつくっていかなくちゃいけないというところに、挫折したところがありました。僕は目立ちたがり屋だったんで、なんか自分のキャラクターが活かせるものをこの学校の中で見つけたいなあとあって、鼓笛隊に入ってみたり、特設クラブの和太鼓に立候補してみたりしたんですけど、なかなか自分が納得いくようなポ

ジションが得られなかった。ずうっともんもんとしているうちに「自分が好きなことを自分ひとりでしてみようかな」と思いました。

小学校6年生の夏休みにバードウォッチングにはまりまして、朝早起きしてお弁当を作ってもらって一人で山に登って、双眼鏡で鳥を見たり、鳥の声をマイクで拾ったりしているような小学生だったんですけど、それをグループ研究で夏休みの宿題として提出したら、なんか一つ責任を果たしたような気がして、それからずっと学校に行かなくなっちゃったんです。それからは、やっぱり好きなことをとことん追求する性格だったんで、山登りやアウトドア、それから音楽に目覚めていきまして、中学校に入ってから、学校に行かずにバンド活動をしていました。それまでは、自然の中で遊んでいるのが好きな子どもだったんですけど、おしゃれや恋に目覚めて、髪を金髪にしたり、ピアスあけたり、本当にすきんだ格好で、仙台に中学生で一人暮らししている時があって、その時はもう大人みたいな、当事ビジュアル系といいましたけど、そういう格好で盛り場を歩いてお酒飲んだりとか悪いことばかりしていました。

でもやっぱり自分がどっかでむなしくなったというか、何か自分を表現していきいたいという気持ちがあってそういうことをしていたんだけど、結局格好での表現に留まっていたんですね。もっと自分を知ることとかその自分を知って本当にそれを理解してくれる人に出会うことが、なにより一番最初に来なかったら、表現にも生き方にもならないということに気づいて、それからは髪をすばと切って真っ黒くして地味な感じになりました。

僕ができることは、作曲と作詞、表立った

アーティスト活動よりも、楽曲を提供したり、裏方の仕事をしたいなと思って、いろんな事務所やプロダクションにCDとか作品を送るわけですよ。でも、そこまでしてもああいいう業界というのは、100送っても1も返事がないです。今ようやく見つけたプロダクションと仕事させていただいているんですけど、みなさんの目にとまったり、テレビで流れる15秒にたどりつくまでに、今1000倍2000倍の競争率です。その2000曲、3000曲のうちの1曲を出せたらいいなという、そういうものすごい競争の中で、毎日作曲家として修行しています。

でも、そういう結果主義、売り上げ主義の世界にいと、やっぱり自分の能力というものに悲観的になるし、才能というものに対してシビアになりすぎて、本当に苦しくなってくる時がある。そんな時に、先程流したDVDみたいに、自然の中に自分がある。自然は自分を評価しないですから、そういう自然体でいる自分というものをもちつつ、競争の世界にいるというところで、気持ちのバランスをとっている感じです。

今思うのは、小学生、中学生、学生さんって、やっぱりどっちみちものすごい競争の中にいるんですよ。でもそんな中で、自分らしさを保てるものを、家族だったり、近い人たちが共有してくれていると、すごく強い。たぶん、不登校で家がすさんでいるとか、家庭内暴力で息子が怖いとか、ひきこもりで何を話していいかわからないという時、それをぐうっとさかのぼっていったコアの部分に、もしかしたら何かヒントがあって、ちょっとした事でも家族みんなで共有できて笑える一瞬のかけらがあるんじゃないかなあと考えていて、それを意識して育てていくといいと思

うんですよ。それを探するのに5年、10年かかって、僕はいいと思うんですね。そういうものが見つかったら、きっと世の中との接点というの、外側に自然に生まれてくると思うんです。

だから、ひきこもりをやっている、学校に行っていないなくても、ものすごい宝物を10年後、20年後に開けることができることを約束されていると思ってほしい。僕も、宝物はなんとなく見えてきたかなという気がするんですけど、まだ何かあるんじゃないかなとか、これでお仕舞じゃないぞとか思いながら、親父もお袋も他の兄弟も、それぞれ何かやっているんだなということを感じながら、みんな帰ってきた時は、おいしくお酒を飲もうねというところで、それぞれ暮らしています。

司会：宝物が見えてきたと言われていたけれども、宝物をたくさん持っているんだなあというふうに思いました。

やはり親としては気になるのは、生活していけるのかということだと思いますが、すみません、収入とか現実の生活は、どうですか。

大岡：収入は、はっきり言ってシビアです。音楽というのは、ヒットが出ていくらの仕事なので、お金を稼ごうと思ったら、他にいい仕事がある正直たくさんあります。ただ、そこでわずかながらでも、評価してくれる人が助けてくれるいくらとか、音楽はいろいろコンピューターをいじることがあるんですけど、その能力をいかしてデザインの事務所に勤めたりだとか、そういう仕事をしながら、親にも時々助けてもらったり、そういう中で暮らしています。

小塩：私はずっと家でやってきたんですけど、ホームシューレは月に1回『ぼる〜ん』という交流誌が届くんです。その交流誌にはお便りコーナーというのがあって、会員同士が雑誌上で交流するという感じなんです。それをずっと家で続けていて、好きなこと、最近あったことを投稿していました。

そのぼる〜んで知り合ったお友達が、「秋葉原に行きたい」とぼる〜んに書いていたんです。今まで家でずっとやってきたんですけど、外出機会がすごく少なかったんです。月一回出ればいいほうで。そのお友達の秋葉原に行きたいという発言を聞いて、ちょっと勇気を出して「私も一緒に行きたいと思っているんですけど、よかったら一緒にいいですか」という話をして、予定を立てて行ったんです。それがきっかけかな。15、6歳ぐらいの時だと思います。それまでずっと親と一緒に、電車の切符の買い方すらわからなかったのが、友達と秋葉原へ行くということをきっかけに一人で外出することができるようになって、いろいろ幅が広がってきました。ホームシューレでぼる〜んを作る編集会議というのを月一回やっているんですけど、それにも一人で試してみようと思って、2、3年前に参加したら、スタッフの方から「ボランティアさんをやってくれる人を探してるんだけど、よかったらどうか」と声をかけていただいて、ホームシューレのボランティアを始めたんです。

今自分がどう生きているかと言われると、いろんな人の生き方を見て、本当にいろんな人がいるんだなあと。自分のきれいなものとかあっても、他には好きな人がいると思うんです。そんなふうを受け入れるということを楽しみたいと思っています。

司会：お話よくわかりました。小塩さんは17歳からりんごの木にも2年ぐらいおられましたね。今20歳ですか。ホームシューレでいきいきと、今度はみなさんのお話を聞く側ですね。15、6歳まで、一人で外に出なかったというお話でしたけれども、親が心配しても時期がくれば、必要性があれば、自発的に外に出て行くというようなことですよ。だから、心配ないのかなって思いました。

小塩：そうですね。私の場合は、偶然会員のお友達が書いていたのを見て、ああ、じゃあ行ってみようかなと。もしかしたら今までずっと家にいた反動というのがあったのかもしれないです。ずっと家にいたから、なんとなく外にも興味がでてきて、なんとなく行きたくなったという、そういう反動が出たのかもしれないです。

司会：さっきの芹沢さんのお話に繋がる体験かなあというふうにお聞きしました。

長井さんは、後でパワーポイントを使ってまとめてお話ししていただきますので、他のみなさんに、ではこれからどう生きていきたいですかというのをお話しいただければと思います。

これからどう生きていきたい？

前北：今26歳です。これから何がしたいかという、数年前に誓いを立てたんです。僕はプロのスタッフになると。プロの不登校の子たちを支えるスタッフになろうと思ったんです。実際にそうしようと修行を数年間して

まいりました。だからみなさんと懇親会をしていても、子どもと一緒にの空間ではお酒を飲まないという誓いを立てたので、僕は一滴も飲んでないんです。

ついにネモネットでは、新しくフリースペースを始められることになりまして、もともと交流会みたいな形で月2回あったんですが、それをもう少し発展的にやろうということで、そういう取り組みを始めます。たとえばringの木だとか東京シューレだとか全国にフリースペースいっぱいありますよね。だけど、そうじゃない、僕が信じる、ネモネットが信じることをしよう。真似するんじゃなくて。4年5年ぐらいずっとそれを考えていたんです。僕がどういう場所だったらよかったのか。

僕は今は軽く話しているけど、めちゃめちゃつらかったわけですよ。こんなところで話をするような人間では全然なくて、毎日毎日鬱々として、増田さんがうちの母親だとしたら後ろに隠れながらサアッと歩いていく、みたいなね。もちろん電車なんかにも乗れない。そんな弱い人間が、さあどういうところだったらよかったのかなあとずうっと考えていたんですね。まず嫌だったのが、大人のものさしで子どもを判断するということだったんです。

たとえば不登校の時、僕の母親も学校に行かなくなった僕に対して、あの子はどうなるんだろうとか、ああ心配だとか、よからぬ不安を抱いたわけですね。でも、学校へ行っていない時の僕と、行かなくなった日の一日前の僕とは、そんなに変わらないんです。不登校というのは、一つの状態であってですね、そこで子どもを判断するのは違うでしょ。その子全体を通して、その子がどうなんだという話でしょ。もし「不安だ」と言われた時は

「そうだね、不安だね」で、いいはずなんです。ということで、ネモネットではそういうような、教える教えられるではないことをやっていきたい。昨日そういう話をしていたら、「ネモネットは畑を作りたいんだね」と言われました。収穫物を得る、成果をあげるスペースではなくて、それぞれの可能性やそれぞれの子どもの気持ちに合わせた場所が作りたいたんだね、と。ああ確かにそうだなあというので、そういうのをやって、そのうち90分話すようになるので、ネモネットが今後どうなるか、見ておいていただけるとありがたいです。

大岡： 30になるちょっと前でしょうか、なんとなく自分にプレッシャーがあったんですが、全国合宿に来るたびに思うのは、けっこう自分自身では、12、3歳ぐらいの時に、親、学校、周りの大人たちともものすごい激しい戦いをして、それを共に戦う仲間をこういうところで培って行って、なにか今の自分がいるという気がするんですけど、その我が闘争を振り返ると、その時めっちゃ楽しかったなということです。電車であっちこち行ったりとか、友達同士で愚痴を言ったり、その時やっぱり苦しい、ここじゃない自分の居場所があるはずだと思っていたようなバイタリティって、ものすごかったなと思うんです。それを今の自分は忘れてないだろうか。なんかちょっと平和に生きられている。でも、まあまあこんなもんでいいんじゃないのと、守ろうとしちゃっている自分を飛び越えて、あの時みたいに、もっと苦しいことがあっても、笑って乗り越えていけるような若々しさとかときめきみたいなものをずっと持っていたい。それを、不登校している子たちが集まる場所

だったりとか、うちの親は「んだね・かふえ」というのを郡山でやっているんですけど、そういう場で、活かして関わっていただけらいいと思っています。ですから「んだね・かふえ」もこれからもよろしくお願いします。

小塩：大岡さんの話にもあったと思うんですけど、私も去年10代から20代に変わって、二十歳になると成人するということになるじゃないですか。私の周りの同年代の友達も大人になるのが怖い、いきなり成人にされてしまうのが怖いと言っている子が本当に多かったんです。私はそんなに不安が大きい方じゃないですけど、いきなり成人と言われて、じゃあどうしたらいいのか。大人になるって、結局どうということなのということを一時期考えたりしたんですけど、実際なってみると人間中身って全然変わらないものなんですね。1年歳取ったからって、中身が急に大人になるとかそういうことじゃなくて、長年の経験とかの積み重ねで、気がついたらいろんなことをわかっていて。年齢の問題ではなく、経験の積み重ねが大人ということであると思うんです。でも大人になると、どんどん昔のこと、子どもだった時のことを忘れていっちゃう。でも、その時の気持ちを忘れないで生きていきたいなと思っています。

研究を通して生き方を探る

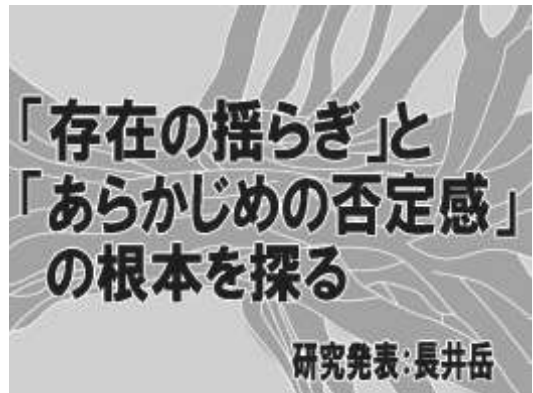
司会：それでは長井さん、自分自身を掘り下げたというような研究でしょうか。お願いします。

長井：シューレ大学は、自分の探求したいこ

とや表現したいことを思う存分やる場所です。映像や演劇などの表現とか、知りたいことを知る講座とかなんでもできます。最近人気があるのは「生き方創造コース」という、自分の生き方をいろんな人と意見を交換する中で自分自身で考えて創っていくという講座です。それに関連して、僕は「自分から始まる研究」というのをやっています。今自分が気になっていることとか、ここにあるもやもやであるとか不安とか苦しさをヒントに研究していくやり方です。

今から、去年やった研究を発表したいと思います。テーマは「存在の揺らぎとあらかじめの否定感の根本を探る」です。

パワーポイントを使いながら発表



シューレ大学に入った頃、僕は劣等感のかたまりでした。それが、ソーラーカーを作るとか、演劇をやるとか、講座をやっているうちに、軽くなりました。ところが、揺らぐんです。立派な大人の人とかに強く何かを言われると「すいません」という気持ちになったり、今僕34歳になるんですけども、そろそろ結婚して子どもを作って家を建てて、とか考えたりすると、揺らいでしまうんです。せ

っかく自信を得てきたのに「僕が間違っています」という気持ちになって、また苦しくなってしまう。これが「あらかじめの否定感」です。

その根本を自分の人生から探ろうということで、研究を進めてきました。

僕は小6の時はスーパー優等生でした。テストはほとんど100点で、学級委員長でした。しかし、中1の秋に、僕は不登校をします。優等生から不登校へ、非常に大きな変化だと思えます。

僕の入った中学校は、とても荒れた学校で、不良と呼ばれる先輩たちがいました。その状況の中、クラスの中で、やんちゃな子どもたちが力を持ってきて、僕は気づいたら弱い方のグループに入れられていました。

ある日スポーツテストで学級委員長として同級生を引率していました。この時に、先輩が怖いことや、同級生の意見を尊重する中で、うまくいかないことがあったんです。そのことが、同級生から「僕のミス」だととられました。

また、僕の中学には「丸刈り校則」がありました。大好きな友達のK君が、中学入学時に一度は丸刈りにしたんですが、ある日「髪は切らない」と宣言をしました。彼が校則違反になるのは嫌だったので、彼の髪が伸びる前に校則を変えようと思いました。ところが、校則が変わらないうちに、彼の髪は伸びてしまった。そして、先生たちにとがめられて、転校するか、髪を切るかどっちかだと言われて、K君は転校していきました。僕はすごく悲しくて、泣きながら親に話す中で「僕が髪を伸ばす。彼の代わりに」と言って、伸ばし始めました。

すると、Y君という同級生が「なんで長井は髪を伸ばせるんだ」と文句を言ってきて、嫌がらせが始まりました。朝、「上履きをちょっと貸してくれ」と言われ、次の休み時間に「返して」といっても返さずに怒鳴り返してくるとか、ベランダに連れ出されて胸倉をつかまれるとか、いろんなことをされました。それらのことは当時、とても辛かったのですが、自分にとって大きいことだと思っていませんでした。

ところが17歳の時、Y君が交通事故で亡くなったんです。その時、友達みんな泣いているのに、僕は全然悲しくなくて、まったく泣けなかったんです。

中学校の体験を改めて捉えなおしました。僕とY君は、二人きりでいたのではなく、周りにはクラスの人々がいました。僕がY君に嫌がらせをされているのを、誰も助けてくれませんでした。それは、Y君だけに限らず、その場所が僕を否定してきたということになったのではないかと。もしY君がまずいのであれば、Y君が責められたり、まずいと言われるはずなのに、誰もそれを言わないということは、僕がまずいんじゃないか。



クラスでは否定されていたけれども、クラス以外にも部活や家族があって、部活ではうまくやっていたし、家族は僕を認めてくれた。じゃあ、何でクラスの経験によって自分の全体を否定されたように感じてしまったのか。それを探ろうと、小学校までさかのぼりました。

小学生に入ったばかりの頃、僕にはいろんな遊び場所がありました。近所では友達がたくさんいる。親がやっている居場所でも遊べる。親の友人たちにも可愛がられました。

ところが、学年が上がっていくにつれて、学校の割合がどんどん大きくなっていて、特にクラスの人とすごく遊ぶようになっていく。

そして、小4になる春に転校するんです。転校先では、学校以外に遊ぶ場所がなくなりました。友達がいなかったんですね。友達をつくりたいと思うとき、僕は学校の中で努力せざるを得なかったのではなかろうか。その努力とは、クラスの中で人気のある人を参考にしていく。それは、優等生や先生に褒められる人でした。そういう人になろうと努力していくうちに、僕は「100点の長井君」になったのではなかろうか。

これは、関係の多様性がどんどん学校に集約されていき、学校で努力していくことで、学校の中で評価が上昇したということではないか。

この時期に僕が得た自信とは、「人が肯定すると、僕でいいと思う」という他者に依拠した自信ではないか。自分で自分自身を肯定するのではなく、人が褒めるから自分でよい。

これは、他者に否定されれば、簡単に「僕では駄目だ」となってしまう。僕は初めは「自分の地面」の上にあった。自分で感じ考え、自分が好きなものが好きだった。ところが、学校に馴染もうと努力する中で、「自分の地面」から離れて、学校地面、「他者依拠地面」に移動したんじゃないか。自分の地面を離れて、自分の存在を誰かに依拠するその時に存在が揺らぐんじゃないか。

そして、存在が揺らいだ状態で場に否定された経験が、あらかじめの否定感になったのではなかろうか。だからこそ、僕は不登校になったのではないか。



不登校になって数日後、友達が迎えにくるんです。友達をなくすのがつらいから行くことにしました。でも、学校に行く道すがら、毎日泣きそうになる。そんな自分を「弱い」と思いました。Y君に逆らえないし、登校拒否でもある。しかし「自分が弱い」ということを受け入れるわけにはいかない。そして、強くなろうと頑張って、頑張りすぎて続かない、ということを繰り返していくうちに「自分の弱さ」をどんどん確信していく。これがシューレ大に入るまでの自分の姿だったので

はなかろうかと思います。



じゃあ、どうすればよかったのだろうか。これは、「社会地面」です。世の中の価値観ともいいます。その地面の上で僕が「これが好きだな、このように生きたいな」と感じた瞬間に、地面が抜けて、奈落の底に落ちていくというような恐怖を感じます。

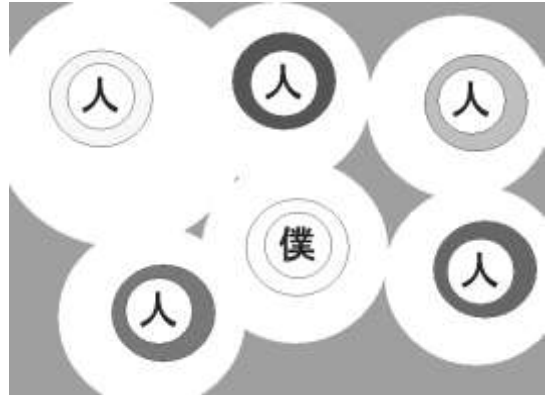
でも、「社会地面」もけっこう怪しいとも思います。今や、大学出ても仕事がないし、結婚しても幸せとは限らないし、子どもを産んでも殺したり殺されたりという話があって、「こうすれば大丈夫」という確実な価値観はもうあんまりない気がする。そう考えると自分を支えられるものは何もない。

でも、目を凝らして自分の足元を見ていると、自分がなんとか立てるくらいの地面はある感じがする。そこから周りを見ると、そういう人は他にもいる気がする。その人たちの周りに生きやすい空間が少しなりとも広がっている感じがする。

「僕が僕であろう、自分なりに感じ考えて生きよう」と思っている間に、自分の周りに生きやすい空間ができていっているようにも思う。

僕に限らず、自分から始まって、自分が生

きやすいあり方を考えていく人が少しでも増えていけば、世界がいろんな人にとって生きやすくなるんじゃないかと思っています。



司会：すごい拍手ですね。長井さん、これからどう生きて行きたいかというのをお願いします。

長井：「この先どうするのか」とよく人に聞かれるわけですが、今はこのような「自分から始まる研究」をしたり、会社を起業するというのもしています。昔の自分からしたら夢のような「自分から始まって生きていく」ことが、本当に起こっていて、人と一緒に生きていくことが進んでいることを日々実感しています。僕はこのまま生きていく感じがします。

司会：なんかどきどき、わくわくという感じですね。

さいごに、今悩んでおられる子どもたちや親御さんに伝えたいことを、お願いします。

子どもたちへ、親の方へ、伝えたいこと

前北:一つ目は、不登校の問題を考える時に、子どもを中心に、主人公にして考えてあげてほしいということです。ついついスタッフをやっていたり、親をやっていると、子どもの問題なのに、自分の問題として取りがちで、それは、子どもの生きる力や自信を取り除いていくことですよということをお話してください。誰のためにやっているのかということを感じながら、サポートして行ってあげてください。

もう一つは、僕は大人になることはすごい不安だったんですが、今思うと、大人になることはそんなつらくないぞ、すごい楽しいぞということです。楽しいことを追求して試してみてください。今日すげえ遊戯王カードがおもしろいと思ったら、遊戯王カードいっぱいやってみてください。それでいいと思います。そうしたら、明日が見えてくるし、そのうち楽しい気持ちでいっぱいになって、大人になって楽な気持ちでいられると思います。なので、大人かもしれないという年まで生きてみてください。

大岡:ここにいらっしゃる方は、不登校のお子さんや親御さんだと思うんですけども、マイノリティになるとすごく自分を客観的に見ます。それでつらい思いをすると、人にけっこうやさしくなれたりもするもので、そういう人というのは僕は人から愛される存在だと思います。不登校しても絶対大丈夫です。頑張ってください。

小塩:いろんな考え方の人がたくさんいて、たまには自分の意見と正反対の人とぶつかる

こともあると思うんですけど、まずはその相手を受け入れて、それからじゃあ自分はどう思っているのかということをお話の中で消化して、それで自分の考え方を広げるという感じで生きていければいいんじゃないかなと思います。

長井:子どもも親も大変だと思うんです。でも、だからこそ、「こうしたい」とか「こうありたい」とか、「この人を支えたい」とか、そういう気持ちを大事できれば、と思います。僕はそのように生きていきたいと、皆さんも一緒にお互いに大事にしながら生きていきませんか。

起業した「創造集団440Hz (ヘルツ)」という会社の440Hzは、赤ちゃんの泣き声で、世界共通だそうです。心の奥底からシンプルな声、飾らない声をあげたいと、この名前にしました。今は、映像制作とデザインの仕事を中心にやっています。デザイン名刺もつくっていて、興味がある方は、ぜひホームページをご覧ください。

司会:ありがとうございました。たくさん元気をいただきました。4人のみなさん、これからも、あなた方よりももっと上の大人たちを励ましてあげてくださいね。よろしくお願ひします。(拍手)

